
千葉県における淡水ガメの大量死:捕食者はアライグマ?

小菅康弘

NPO 法人カメネットワークジャパン

Mass death of Fresh water turtles in Chiba. : Is the predator Raccoon?

By Hiroyasu Kosuge

Fresh Water turtle Network of Japan

現在、日本の淡水カメは、生息地域である田んぼや河川、池沼などの護岸、用水の整備、道路の新設等の環境の改変によって、個体数の減少が危惧されている。加えて、外来種の侵入がさらに大きな脅威となって影響を及ぼしている。

そのひとつの事例として、2008年2月から3月にかけて千葉県・君津市の河川にて行った淡水カメの生息調査にて、例年にないほどの数のカメの死体が発見されたことが挙げられる。死体の数は、クサガメ94個体、ニホンイシガメ11個体で合計105個体であった。死体の特徴としては、1個体を除いては甲羅に外傷は見当たらず、頭部、四肢、尾などの部位に外傷あるいは欠損している状態で、内臓がなくなっているものも少なくなかった。また、捕獲された生存個体(99個体)ではクサガメでは30%、ニホンイシガメでは40%の数の個体が、頭部、四肢、尾の甲羅以外の部位に外傷あるいは欠損が見られる状態であった。その外傷および欠損の状態が段階的に広がってはいないことと、個体の健康状態が悪くないことから、病気や中毒症状ではなく、ほかの動物による捕食が原因と考えられた。

そのため、調査地周辺に生息する哺乳類の捕獲生息調査を行い、アライグマ5個体、タヌキ3個体が捕獲された。胃内容物を分析すると、アライグマからはカメは発見されず、タヌキ1個体からカメの頭部や肢などの一部が発見された。

タヌキは在来種であり古来よりカメを捕食していたものと考えられるが、アライグマは、本来は日本にはいなかった北米原産のペット由来の外来種であるため、新たに地域の生態系に大きく影響を及ぼす恐れのある動物として注目すべき動物といえる。

県内のほかの川でも調査を行ったところ、複数の地点で今回と同じようなカメの死体と同時にアライグマの足跡が発見されて、被害が広範囲に及んでいることが予測された。

今回のカメ大量死の原因としては、アライグマが疑わしいが、明かとするためには、カメに対して最初にダメージを与える動物を特定する必要があり、現在もビデオ撮影等を用いて調査を進めている。

●メッセージ

カメの大量死の原因は明らかとなっていないものの、これ以上の被害を防止する上で、一刻も早くアライグマを取り除くことが必要です。しかし、一部の地域を除いて捕獲等の対策はまだ始まったばかりというのが現状です。今、日本ではアライグマに限らず、元々ペットであった動物が

捨てられたことによって、日本の自然を脅かす存在になっています。飼いきれなくなったからといって、絶対に野外へ放すべきではありません。最後までペットと付き合い続けることが、そのペットにとっても大事なことです。都市河川や公園でよく見かけるミシシippアカミガメ(ミドリガメという名で売られているカメ)も、もともと日本にはいなかった外来種です。今では日本全国に分布し、水草や、魚、鳥、カニ、エビなど食性が広いことから、各地で影響が心配されています。これ以上は広げてはいけません。里山を代表するように日本人は古来より自然とうまく向き合ってきました。これからはずっとうまく向き合っていくには、一人ひとりのモラル、そして、多くの方々のご理解、ご協力がが必要です。是非お互い協力しあって、これからも日本の豊かな自然や文化を次世代にも伝えていくために大切にしていきたいと考えています。

亀記録について

亀崎直樹・谷口真理

On the Kikiroku (Japanese Fresh Water Turtle Database)

By Naoki Kamezaki and Mari Taniguchi

生物多様性の保全の重要性が認知されるようになった昨今、個体群生態学の研究もかなり進み、種ごとの知見もかなり集積されるようになったのは喜ばしいことである。ところが、生物多様性の保全を考えたとき、最も重要で基本情報となるのがその分布と密度である。しかし、種ごとの分布については不明な部分が多く、極めて不十分な知見しかない。確かに、環境省により自然環境保全基礎調査がほぼ5年おきに行われ、それによって作成された日本の動物分布図集(www.biodic.go.jp/kiso/atlas/)に見るように、分布が明らかな種もある。しかし、「種の多様性調査(動物分布調査)対象種一覧(www.biodic.go.jp/kiso/do05/72_ryo.pdf)」では、まだ、情報がない、あるいは不足しているとされ、分布図が作成されていない種も少なくない。

筆者らは、神戸市立須磨海浜水族園の生物多様性保全事業の一環として、西日本の淡水性カメ類の分布について2010年より調査を開始したが、既存の知見の少なさには驚くばかりであった。2011年の段階において、日本には7種(内、ミナミイシガメは2亜種)の淡水性カメ類が分布しているが、前出の生物多様性調査において分布図が描けている種はヤエヤマセマルハコガメ *Cuora flavomarginata evelynae*、リュウキュウヤマガメ *Geoemyda japonica*、ヤエヤマイシガメ *Mauremys mutica kami* の2種と1亜種であり、それ以外の種もしくは亜種、すなわちニホンイシガメ *Mauremys japonica*、クサガメ *Chinemys reevesii*、ミシシippアカミガメ *Trachemys scripta elegans*、ニホンスッポン *Pelodiscus sinensis*、ミナミイシガメ *Mauremys mutica mutica* については分布図を描くための情報が不足しているとされている。

この中でニホンイシガメは日本固有種でありその保全は重要であろうし、ミシシippアカミガメは外来種であり、生態系やニホンイシガメへの影響が危惧されている。また、クサガメに